類型学研究（2019）　*63-78*

「トリ（鳥）」の連濁現象

―「―トリ」か「―ドリ」か―

山村　仁朗

１．はじめに

複数の語が結合して一つの語となったものを複合語という。

春　＋　雨　＝　春雨［複合語］

また、複合語の前方の要素を前項といい、同じく後方の要素を後項という。

雨傘［複合語］　＝　雨［前項］＋傘［後項］

今、複合語後項の語頭音に注目すると、本来清音である後項の語頭音の語が複合語になることによって濁音化することがある。その現象を連濁という。

かさ（傘）　⇒　あまがさ（雨傘）

連濁についてはいわゆるライマンの法則をはじめとして、多くの研究がなされてきた。

『日本語学研究事典』によると、連濁については次のような指摘がなされてきたという。

１　前項と後項の熟語度の強いものに起こりやすい。
２　擬声語・擬態語では連濁しない。
３　後項の第２音節が濁音の場合は連濁しにくい。
４　前項末尾が発音の場合は連濁しやすい。

しかし、それらの指摘は連濁一般についてのものであったように思う。

例えば、「トリ（鳥・鶏）」という語であるが、「トリ」は複合語後項となる場合に、

連濁を起こす場合（オンドリ）と起こさない場合（ヤキトリ）とがある。

このように個々の語の後項が連濁を起こす場合と起こさない場合についての検討はあまり行われてこなかったのではないか。

本稿では、現代語の「トリ（鳥・鶏）」を後項にもつ複合語を取り上げて、個々の後項の連濁現象が起こる場合とそうでない場合との規則性について考えてみたい。併せて、そのような規則性を考える際にはどのような方向で考えるべきであるかも検討したい。

2. 先行研究の整理　―窪薗（1999）より―

先に、複合語の連濁現象についてはさまざまな指摘がなされてきたと述べた。それらの指摘を窪薗晴夫氏の整理に基づいて概観する。

窪薗氏は連濁が起こるか否かを決める要素の点から、先行研究を 4 つにまとめている。

1 つ目は語の種類に関するものである。連濁が起こるのは和語であり、外来語では連濁が起こらないという。

（1）外来語

デジタル　＋　カメラ　→　○デジタルカメラ　×デジタルガメラ

大　＋　サーカス　→　○大サーカス　×大ザーカス

中には「カルタ」「カッパ」のように例外的に連濁を起こすものがあるが、それらの語は日本語に入ってからの時期が長く、外来語という意識が薄れるくらいに日本語として定着しているからであるという。

（2）例外的に連濁を起こす外来語

いろは　＋　カルタ　→　いろはガルタ

雨　＋　カッパ　→　雨ガッパ

また、漢語も連濁を起こしにくい。

（3）漢語

茶話　＋　かい　→　○茶話かい　×茶話がい

総合　＋　しかい　→　○総合しかい　×総合じかい

しかし、漢語は和語と比べると連濁を起こしにくいが、外来語よりは連濁を起こしやすいという。

（4）連濁を起こす漢語

食用　＋　きく　→　食用ギク（食用菊）

文庫　＋　ほん　→　文庫ボン（文庫本）

以上のように、連濁は和語で一番起こりやすく、漢語では部分的に起こり、外来語ではほとんど起こらないという。

２つ目は音韻構造に関わるものである。次の複合語は連濁を起こしている。

（5）うわぶた（上蓋）、しぶがき（渋柿）、なまがし（生菓子）

一方、次の複合語は連濁を起こさない。

（6）あかふだ（赤札）、あいかぎ（合鍵）、やまかじ（山火事）

（5）と（6）には後項要素の語頭以外に初めから濁音が含まれているか否かの違いがある。その違いが連濁の有無に関係する。つまり、複合語の後項要素に濁音がない場合は連濁が起こることがあり、濁音がある場合は連濁を起こさないというのである。これはいわゆるライマンの法則である。

（7）○うわ（上）＋ふた（蓋）　＝うわぶた

○しぶ（渋）＋かき（柿）　＝しぶがき

○なま（生）＋かし（菓子）＝なまがし

×あか（赤）＋ふだ（札）　＝あかふだ

×あい（合）＋かぎ（鍵）　＝あいかぎ

×やま（山）＋かじ（火事）＝やまかじ

しかし、ライマンの法則は一部に例外があることも指摘する。例えば、「はしご（梯子）」は複合語の後項要素となる場合、連濁が許容される。濁音を含んで後項要素となるが連濁が生じるのである。

(8)　○なわ（縄）　＋はしご（梯子）＝なわばしご
　　○ひなん（避難）＋はしご（梯子）＝ひなんばしご

このように一部の例外はあるが、ライマンの法則を連濁が起こる原理の一つとして位置づけている。

３つ目は複合語の項の意味構造の差に関するものである。前項と後項が意味的に対等な関係にある場合、連濁は起こらない。

(9)　よみかき（読み書き）　すききらい（好き嫌い）　のみくい（飲み食い）
　　いきかえり（行き帰り）

例：よみかき（読み書き）　＝読む＋書く（並列構造）

一方、前項が後項を意味的に修飾する構造を有している場合は連濁を起こすという。

(10)　あてながき（宛名書き）　たべずぎらい（食べず嫌い）
　　やけぐい（やけぐい）　ひがえり（日帰り）

例：あてながき（宛名書き）＝宛名を書く（修飾構造）

４つ目は複合語の内部構造（枝分かれ制約）に関するものである。三項構造の複合語は対等に三項が結びつくのではなく、真ん中の項が前項と結びついたうえに後項が結びつく場合と、真ん中の項が後項と結びついたうえで前項と結びつく場合に大別できる。そのうち、真ん中の項が前項と先に結びつく場合、連濁が起こる。後項と先に結びつく場合、連濁が起こらないという。

(11)　○オジロワシ（尾白鷲）　＝　【尾が白い】＋鷲
　　×モンシロチョウ（紋白蝶）　＝　紋が入った＋【白い蝶】

　　○ぬりばしいれ（塗り箸入れ）　＝　「漆塗りの箸」を入れる容器
　　×ぬりはしいれ（塗り箸入れ）　＝　漆を塗った箸入れ

以上、窪薗氏の整理に基づいて、先行研究を概観した。

3. 諸説の検討

それでは、上記の４つについて検討を加えてみたい。

まず、これらの先行研究には例外も存在するということを指摘しておく。例えば、先のライマンの法則において、濁音をもつ「はしご」が後項となる場合に「なわばしご」と連濁を起こすことはその端的な例である。従って、上記の４つの研究成果は傾向としてはそうであると言えるが、連濁の絶対的な法則であるとは言えないであろう。

次に、上記の４つは連濁現象一般についての指摘であることに注意したい。これらは複合語一般についての指摘であるが、個々の複合語後項においても連濁をする場合としない場合を有するものがある。

例えば、本稿で取り上げようとしている後項「―トリ（鳥・鶏）」がそれである。

「―トリ」は「チドリ」「ムクドリ」のように連濁する場合がある。一方で、「ヤキトリ」のように連濁しない場合がある。このように、個々の後項が連濁を起こすか否かについて分析する際に、上記の４つの研究成果は有効であろうか。

「―トリ」の場合で検討すると、１つ目の指摘は有効ではない。一つの後項（語）に和語、漢語、外来語の区別はないからである。

２つ目については一応、有効である。「―トリ」は濁音を含まないため、連濁を起こす可能性がある。しかし、問題はその先にある。後項「―トリ」がどのような場合に連濁を起こし、起こさないかを明らかにしたいのである。その場合には、この指摘で十分であるとは言えないのである。

３つ目に関しては、「―トリ」の連濁分析を行う際に有効な見方となり得るであろう。但し、修飾構造か並列構造かという違いが連濁の有無に対して必ずしも規則的でないことも事実である。窪薗氏が指摘するように、「ひらがな」「カタカナ」など修飾、並列の構造差がないにもかかわらず連濁の違いが生じることもある。この方法を用いる場合は注意を要する。

４つ目について、三項構造の複合語の連濁を考える際には有効であるかもしれない。しかし、「―トリ」を後項にもつ複合語の大半は二項からなる複合である。その場合にはこのことをもって「―トリ」の連濁の有無を明らかにすることはできない。

以上のように、連濁の研究はさまざまになされ、有益な研究成果も多数ある。しかし、個々の後項要素の連濁の有無を問題にする場合、それらの研究成果だけでは解決

できないことが多いと考える。

それでは、個々の複合語後項の連濁の有無について考える際にはどうすればよいのかということになるが、具体例を個別に検討していくよりほかない。

以下、複合語後項「—トリ」の連濁について検討する。

4. 複合語後項「—トリ（鳥）」への適用

4. 1. 用例の分類

下記の表は、北原保雄編『日本語逆引き辞典』から抜き出した「—トリ」を後項にもつ複合語である。この表を対象に「—トリ」の連濁の有無について考察を行う。

—トリ（10）	—ドリ（38）
a．クモトリ（雲鳥）	カイドリ（飼い鳥）
b．コウノトリ（鸛）	ツガイドリ（番い鳥）
c．ニワトリ（鶏）	ヒクイドリ（火食鳥）
d．アオイトリ（青い鳥）	アホウドリ（阿呆鳥）
e．シラトリ（白鳥）	オナガドリ（尾長鶏）
f．ネトリ（寝鳥）	バカドリ（馬鹿鳥）
g．コトリ（小鳥）	ナガナキドリ（長鳴き鳥）
h．オオトリ（大鳥・鳳）	ムクドリ（椋鳥）
i．ヤキトリ（焼き鳥）	ユウツゲドリ（木綿付け鳥）
j．ミズトリ（水鳥）	ハルツゲドリ（春告げ鳥）
	ヨブコドリ（呼子鳥）
	ミヤコドリ（都鳥）
	カンコドリ（閑古鳥）
	ジドリ（地鶏・地鳥）
	オシドリ（鴛鴦）
	カシドリ（樫鳥）
	チドリ（千鳥）
	ハチドリ（蜂鳥）
	ハマチドリ（浜千鳥）
	トモチドリ（友千鳥）

	モモチドリ（百千鳥）
	ムラチドリ（群千鳥）
	カワチドリ（川千鳥）
	ヒナドリ（雛鳥）
	タビドリ（旅鳥）
	コマドリ（駒鳥）
	ヤマドリ（山鳥）
	ウミドリ（海鳥）
	カザミドリ（風見鶏）
	トモドリ（友鳥）
	オヤドリ（親鳥）
	フユドリ（冬鳥）
	ムラドリ（群鳥）
	ワタリドリ（渡り鳥）
	オンドリ（雄鳥）
	イチバンドリ（一番鶏）
	ニバンドリ（二番鶏）
	メンドリ（雌鳥）

4. 2. 用例の検討と問題点　―なぜ連濁を起こさない例が存在するのか―

上記の表の用例数を数えると、「―トリ」が 10 例、「―ドリ」が 38 例である。このことから「トリ」が複合語後項となる場合、連濁を起こすことが原則であると考えてよいであろう。

そのように考えた場合、なぜ連濁を起こさない例が存在するのかということが問題となる。

ここからはなぜ連濁を起こさない例が存在するのかを個々の例を取り上げながら検討していく。

5. 連濁を起こさない用例の検討

5. 1. 並列構造

2 節に挙げた諸説のうち、３つ目のものは複合語の二項の関係から連濁の有無を説明するものであった。すなわち、前項が後項を修飾する関係にある場合は連濁が生じ、

前項と後項とが並列関係にある場合は連濁が生じない。

ここで問題としている連濁を起こさない「トリ」の場合に当てはめてみると、「クモトリ（雲鳥）」はこの説によって説明が可能となる。「クモトリ（雲鳥）」とは「雲と鳥」、あるいは襖などの図柄の「雲と鳥の模様」のことである。「クモトリ（雲鳥）」は「雲のような鳥」といった修飾構造があるわけではない。つまり、「クモトリ」の二項は並列構造であるため連濁を起こさないのである。

それでは、他の連濁を起こさない例も同様の説明で問題が解決するかというとそうはならない。例えば、「コトリ（小鳥）」は「小さい鳥」という意味であり、修飾構造である。このように「クモトリ」以外の連濁を起こさない例の二項の関係はすべて修飾構造であるため、この説明では連濁を起こさない理由を説明できない。

これらの例については、連濁を起こさない理由を別に考える必要がある。

5. 2. 統語的要因

用例を見ると、例えば次のような統語上の要因により、連濁は生じないのではないかという仮説を考えることができる。

（12）「トリ」の連濁の条件１（仮説）

ｉ．前項と後項が直に結びついていない場合には連濁は起こらない

ⅱ．前項が一般的な複合語の形式でない場合には連濁は起こらない

この仮説が正しいのであれば、上記の表の用例のうち、「コウノトリ（鸛）」「鶏」「青い鳥」について、連濁が生じない理由を説明することが可能となる。

「コウノトリ」の場合から見る。「コウノトリ（鸛）」とはコウノトリ科の大形の鳥の総称である。古くは「コウ（コフ）」と言った。

（13）鸛　こふ　（寺島良安『和漢三才図絵』（1712 序））

つまり、「コウノトリ」は「コウ＋ノ＋トリ」と分析することができる。「ノ」は助詞である。「コウノトリ」は「コウ」と「トリ」は「ノ」を介して複合語を形成しているのである。

（14）コウノトリ＝コウ＋ノ（助詞）＋トリ

そして、このように前項と後項が直接に結びついていない場合には「トリ」に連濁が生じないのである。同様の例に「火の鳥」がある。

次に、「ニワトリ（鶏）」について見ると、「ニワトリ」は「庭つ鳥」から成立したと言われている[1]。

（15）物思ふと寝ねず起きたる朝明（あさけ）にはわびて鳴くなり庭つ鳥さへ（鶏左倍）
（萬葉集 12･3094）

庭つ鳥（庭津鳥）鶏（かけ）の垂り尾の乱れ尾の長き心も思ほえぬかも
（萬葉集 7･1413）

その「ニワツトリ」の語構成は「ニワ＋ツ（助詞）＋トリ」である。「ツ」は上代の連体助詞の形式で、現代語の助詞「の」と同様のものである。「天つ風」のように用いる。

「ニワトリ」は「ニワツトリ」の「ツ」が省略されてできた形である。そのため、「ニワトリ」には連濁が生じないのではないか。つまり、「ニワトリ」に連濁が生じないのは「ニワツトリ」の名残ではないか。

以上の「コウノトリ」「ニワトリ」はｉの連濁の条件が存在するために連濁が起こらない例として説明できる。

続いて、「青い鳥」について見る。「青い」は形容詞であるが、形容詞が複合語前項を形成する場合には語幹形式であることが一般的である。

（16）青山　早生まれ　楽し過ぎ

それに対して、「青い鳥」の「青い」は形容詞が複合語前項となる場合の一般的な形式ではないため、連濁が生じないのではないか。つまり、「青い鳥」は上記ⅱの条件があるため連濁が生じない例として説明することになる。

但し、そのように説明した場合、新たな問題が生じる。「シラトリ（白鳥）」は形容詞語幹形式であるため、ⅱが正しいのであれば「シラドリ」と連濁を起こすはずである。しかし、実際には連濁を起こさない。この問題はどのように解釈すればよいだろうか。

この問題についての解決案を今は持ち合わせておらず、このように考える際には今後考えていかなければいない。ただ、「シラトリ」については複合語前項「シラ（白）」

[1] 『時代別国語大辞典　上代編』

に原因があるかもしれないことを一言付け加えておく。

「白(シラ)」が前項になる複合語には連濁が起こらないものが数多くあるのである。

（17）シラカワ（白川）　シラクモ（白雲）　シラタキ（白滝）

以上、「トリ」が連濁を起こさない用例について、統語面から説明する方法を探ってみた。

5. 3. 音韻的要因

再び、4.1.の表に戻り用例を見ていくと、音韻上の観点から次のような仮説を考えることができる。

（18）「トリ」の連濁の条件２（仮説）

ⅲ．前項が１モーラ（拍）の場合、前項の清濁が後項「トリ」の清濁と対応する。

この仮説を用いると、「ジドリ」「ネトリ」「コトリ」の連濁の有無について説明が可能となる。

「ジドリ（地鶏・地鳥)」は前項「ジ」と後項「トリ」から構成される。そして前項「ジ」が濁音であるからそれに対応して、後項も連濁を起こすのである。

（19）ジドリ（地鶏・地鳥）＝ジ＋トリ

同様に、「ネトリ（寝鳥)」「コトリ（小鳥)」は前項が「ネ・コ」と１モーラの清音であるため、それに対応して後項も連濁を起こさないのである。

（20）ネトリ（寝鳥）＝ネ＋トリ
　　コトリ（小鳥）＝コ＋トリ

「寝鳥」とはねぐらで寝ている鳥のことである。

但し、このように考えた場合、次のような問題が生じる。「チドリ（千鳥)」である。「チドリ」の前項は１モーラで構成され、清音である。それにもかかわらず「ドリ」

と後項が連濁を起こすのはなぜかという問題である。

このことに対して明確な答えを持ち合わせているわけではない。しかし、前項「チ（千）」の側に問題があるのかもしれないということを指摘しておく。「チ（千）」が前項をなす複合語のうち、後項が濁音になる可能性があるものを挙げると、例えば次のようなものがある。

（21）チトセ（千歳）　チハヤ（千早）

これらは「チドリ」と同様に連濁を起こして、「チドセ」「チバヤ」となってもよいはずである。しかし、実際には連濁を起こしていない。このように、「チ（千）」には「チ（千）」が前項となる複合語は連濁を起こさないという制約があるのかもしれないのである。

続いて、「コトリ（小鳥）」に関連させて「オオトリ（大鳥）」のことを述べておく。「オオトリ」とは大きな鳥のことである。この「オオトリ」は前項「オオ」、後項「トリ」という構成であり、前項は２モーラである。しかし、「コトリ」と対になる語であり、「コトリ」に対応して「オオトリ」も連濁を起こさないということが考えられてもよいのではないか。

だがそのように考えた際、別の問題が生じる。「オオトリ」と「コトリ」では「オオトリ」の方が古くから存在する。「オオトリ」は上代から存在する。

（22）…大鳥の（大鳥乃）羽易（はがひ）の山に我が恋ふる妹はいますと人言へば…
（萬葉集 2･210 長歌・枕詞）

それに対して、「コトリ」の初出例は中古である。

（23）野にとまりぬる君達、ことりしるしばかりひきつけさせたる荻の枝など苞（つと）にして参れり　（源氏物語・松風）

その「オオトリ」であるが、『類聚名義抄』では濁音表記がなされている。

（24）●[2]鶴　オホトリ（朱点あり）（観智院本　類聚名義抄・僧中）

つまり、用例の古い「オオトリ」は本来「オオドリ」であった可能性がある。そうであるならば、「オオドリ」に対応して「コトリ」が「コドリ」と連濁を起こしてもよかったのではないか。

---

[2] ●＝さんずい＋鶴

この問題は今後改めて考える必要がある。

以上、音韻上の観点から「—トリ」の連濁について述べた。

5. 4. 意味的要因

ここでは意味的な観点から「—トリ」の連濁の有無について仮説を提唱してみる。

(25)「トリ」の連濁の条件３（仮説）

ⅳ．その語の意味が生物名でない場合には連濁は起こらない。

ⅴ．特定の鳥の名称でない場合、連濁は起こらない。

まず、ⅳについて見ると、「ヤキトリ（焼き鳥）」がそれに当てはまる。「ヤキトリ」は生物としての名称ではなく、食物としての名称である。そのため、連濁は生じないということである。

(26)「焼き鳥」は食物名であるため、連濁は起こらない。

但し、これに関しても必ずしも絶対的なものではない。「酢豚」という中華料理がある。その際に、豚肉を使わず鶏肉を使う料理があるという。それは「スドリ（酢鶏）」というそうである。つまり、なぜ「スドリ」は食物名であるにもかかわらず、連濁を起こすのかという問題が生じる。今後の課題である。

二つ目のｖに話を移す。この仮説から「ミズトリ（水鳥）」に連濁が生じないことが説明できる。

「ミズトリ」とは水中・水辺に住む水かきをもつ鳥の総称である。それに対して、「ヤマドリ（山鳥）」はキジ科の特定の鳥の名称である。両者の違いはある種の鳥の総称であるか、特定の鳥の名称であるかという点にある。そして、総称である「ミズトリ」だけ連濁を起こさない。そのことから、特定の名称であるものだけが連濁を起こし、総称であるものは連濁を起こさないと述べるのである。

注意したいことを一つ述べておく。本稿の「—トリ」の連濁の有無は、北原（1990）を基に作成した表による。だが、近年「ミズドリ」と「トリ」が連濁するのが一般的である。また、近代の資料『和英語林集成』では「ミズドリ」は「mizudori」と連濁した表記となっている。そのため、「水鳥」の連濁の有無および、連濁の変遷を調査する必要がある。

以上、5. で述べてきたことをまとめておく。まず、「トリ（鳥）」が後項となる複合語において、後項「—トリ」は基本的に連濁を起こす。しかし、連濁を起こさない

例外的なものも存在した。その例外的なものに対してはいくつかの用例ごとにそこに共通する統語上、音韻上、意味上の性質から仮説を立てて説明を行なった。一応、全ての例外が例外であることの理由を説明した。

今後はそれらの仮説が起こる原因を解明していく必要がある。

6. 仮説ｖの展開

先に意味上の観点から仮説ｖとして、特定の鳥の名称でない場合には連濁は起こらないと述べた。そこから連濁を起こさない用例を見直すと、実は「コウノトリ（鸛）」以外の用例は説明可能となる。

(27)　アオイトリ（青い鳥）　：青い色の鳥の総称
　　オオトリ（大鳥）　：大きい鳥の総称
　　コトリ（小鳥）　：小さい鳥の総称
　　ネトリ（寝鳥）　：ねぐらにいる鳥の総称
　　シラトリ（白鳥）　：白い鳥の総称
　　ニワトリ（鶏）　：庭にいる鳥の総称（語源）。実質的には鶏を指す。
　　クモトリ（雲鳥）　：雲の中にいる鳥の総称
　　ヤキトリ（焼き鳥）　：焼いた鳥

いくつかの用例について説明を加えておく。「ニワトリ」は特定の鳥の名称である。しかし、語源的には庭にいる鳥であろう。そして、その庭にいる鳥が実質的に鶏を指し、その意味が固定したものであると考える。

次に、「クモトリ」は並列構造として説明した際に、「雲と鳥」、あるいは襖などの図柄の「雲と鳥の模様」のことであると述べた。だが、「クモトリ」には雲の中にいる鳥の総称という意味もある。ここでの説明の場合、後者の意味の方で理解すべきであろう。

また、「ヤキトリ」も食物の名称だが、食用として焼いた鳥の総称と言えよう。

このように、「コウノトリ」以外は仮説ｖで説明が可能である。その「コウノトリ」であるが、これは仮説ｉとして挙げた「前項と後項が直に結びついている」という連濁の条件に反するために連濁が生じないと説明すればよい。

つまり、仮説ｖを全面的に支持するのであれば、「—トリ」が連濁を起こさない用例の説明は仮説ｉと仮説ｖがあれば可能となるのである。

但し、このように考える際には「ニワトリ」や「クモトリ」に顕著であるが、個々

の語の語誌（語源や変遷）への考察が必要であろう。

最後に、本節の方法で連濁を起こさない用例についての説明を行った場合、また新たな問題が生じることを指摘して、本節を閉じることとする。

確かに、仮説ｖと仮説ｉを用いれば、後項「―トリ」が連濁を起こさない理由を説明することができる。しかし、仮説ｖの条件を満たしていながら、連濁を起こすものが存在する。「うみどり（海鳥）」である。「うみどり」は海の上を飛ぶ鳥の総称である。そうであるならば、連濁を起こさず「ウミトリ」となるべきである。だが、実際には「ウミドリ」と連濁を起こす。

この問題はどのようにして解決するべきであるか。連濁を起こさない用例について、まだ現段階では見えていない規則があるのか。あるいは、連濁を起こす例について、一般的に連濁を起こすというだけではなく、何らかの規則を見いだしていくべきであるのか。そのことについても今後の検討課題としたい。

7. まとめと展望

現代語において、「トリ（鳥）」が複合語後項となる場合には連濁を起こす場合とそうでない場合とがある。その「トリ」の連濁現象の有無に規則性について検討してきた。また、その規則性を一般化する方向性についても探ってきた。

今回検討した結果をまとめると次のようになる。

Ⅰ．現代語において、「―トリ（鳥）」は連濁するのが原則である。

Ⅱ．連濁しない語には統語的要因、音韻的要因あるいは意味的要因があると考えらえる。

・統語的要因

ｉ．前項と後項が直に結びついていない場合、連濁は起こらない。

ⅱ．前項が一般的な複合語の形式でない場合、連濁は起こらない。

・音韻的要因

ⅲ．前項が1モーラ（拍）であり、且つ、前項が清音の場合、連濁は起こらない。

・意味的要因

ⅳ．その語の意味が生物名でない場合、連濁は起こらない。

ｖ．特定の鳥の名称でない場合、連濁は起こらない。

また、上記Ⅱのｖを全面的に用いれば、次のことを考えることができる。

Ⅲ．意味的要因と統語的要因があると考えられる。
但しこの場合、連濁を起こすものとの整合性を考える必要がある。
・意味的要因
ｖ．特定の鳥の名称でない場合、連濁は起こらない。

・統語的要因
ｉ．前項と後項が直に結びついていない場合、連濁は起こらない。

後項「―トリ」は基本的に連濁を起こすものであるという前提に立ち、連濁を起こさないものの原因を探るという方法を取ってきた。しかし、これらの方法では説明しきれない新たな問題が複数出てきた。それらは全て今後の課題である。

従来、連濁については多くの研究がなされてきた。しかし、個々の複合語後項の連濁現象について、従来の理論（特に音韻の面からだけ）では説明できないものがある。そのため、今回は「―トリ」という複合語後項を取り上げて連濁の有無の規則性について検証したのである。

本稿と同様に、個別の複合語後項の連濁の有無を対象とした先行研究は既にある。だが、その数は僅かである。例えば、以下のものなど限られている。

鈴木豊（2016）「字音形態素「ショ（所）」の連濁」
呂建輝（2015）「漢語連濁の通時的考察と接尾語化―「～勢」の場合―」
など

連濁現象一般についての理論的な研究は今後とも大いに進められていくべきである。それと共に個々の複合語後項の連濁現象の有無について詳細に分析・考察していくことも必要であると思う。

また、本稿でしばしば古典語を取り上げた。語源や本来的な用法についての観点が必要となったからである。現代語の研究にあっても、日本語史の視野に入れた研究が今後ますます必要となってくるであろう。

参考文献

小倉新平（1910）「ライマン氏の連濁論（上）（下）」,『国学院雑誌』, 16 巻 7 号,8 号
北原保雄編（1990）『日本語逆引き辞典』, 大修館書店
窪薗晴夫（1999）『現代言語学入門２　日本語の音声』岩波書店, p107－142.
上代語辞典編修委員会（1967）『時代別国語大辞典　上代編』, 三省堂